風景の価値を探る―世界遺産登録に向けた調査の現場から

大平和弘（兵庫県立大学　自然・環境科学研究所　講師）

はじめに

人は大昔から大地の上で自然と共に暮らしてきました。厳しい自然と向き合い、自然から多くの恵みを得るため、地域ごとに違った営みや暮らし方を発展させてきました。また、人はときに人知を越えた自然の力や美しさに感銘を受け、祈りや芸術など地域ごとに豊かな文化を生み出してきました。このような人と自然との関わり方が眼に見える形で示されている、あるいは眼に見えなくとも感じることのできる姿を、我々は「風景」として捉えることができます。

私は、造園（ランドスケープ）を専門分野とする立場から、「人と自然がうまく調和した風景をいかに守り、いかに創り出していけるのか」ということを命題に地域と向き合っています。ここでは、「風景の価値はどこにあるのか」という、専門分野の根源的なテーマが問われる調査の現場から、研究活動の一端をご紹介したいと思います。

世界遺産登録を目指す「鳴門海峡の渦潮」

「うずしお（渦潮）」という言葉は誰しも聞いたことがあると思いますが、実際に本物の渦潮を観潮したことのある人は少ないかもしれません。渦潮がみられる場所は国内に幾つかありますが、最も有名な場所が淡路島南西端（兵庫県南あわじ市）と四国の北東端（徳島県鳴門市）との間に位置する「鳴門海峡」です。狭い海峡に潮が流れ込み、海峡中央の速い流れと海峡周囲の遅い流れとの間の海面に、渦模様が次々と現れる姿は圧巻です（図１）。世界的にみても、これほど大きな渦を間近で見られる場所は珍しく、近年この鳴門海峡の渦潮を世界遺産へ登録するための社会的気運が高まり、世界遺産に相応しい自然的、あるいは文化的に優れた価値を持つことを証明するための学術調査が進められています。

鳴門海峡は、古くは歌川広重が国内の名所を描いた六十余州名所図会（1853～1856 年）に取り上げられ、日本八景（1927 年）や新日本百景（1957 年）、平成百景（2009 年）などにも繰り返し選ばれてきた、日本を代表する風景です。私は、鳴門海峡のどんな風景が称賛され、価値が見出されてきたのかを探ることにしました。

図１　船から捉えた鳴門海峡の渦潮の風景

絵画に描かれた風景から探る

絵画（風景画）は、実際に見えるものを絵師の心情や表現したいことのフィルターを通して描き出されたものです。このとき、主題とする要素や構図によって、描く要素の取捨選択が

行われます。したがって、当前のことですが、絵画に描かれた風景の要素は、その風景を表現する上で、無くてはならない重要な要素といえます。また、絵画は、その場所を訪れたことのない多くの人々に、風景の魅力や価値を伝える媒体となります。そこで、近世から現在(1735～1969 年)に鳴門海峡が描かれた絵画を 56 点集めて、絵画にどんな要素が描かれているのかを調べてみました。

たとえば、図２の浮世絵、歌川広重（1857 年）「阿波鳴門之風景」には、「島」や「渦」のほか、さまざまな海面表現がみられるなど 11 の風景要素を読み取ることができます。この要素を、構図や主題の変化で分けた４つの時代区分（第１期：近世 1735～1851 年、第２期：幕末 1855～明治 1915 年、第３期：大正から戦後～1954 年、第４期：現代～1969 年）で集計しました（図２グラフ）。その結果、鳴門海峡の風景を代表する「渦」以外にも、対岸の「山」や海峡の「岬・入江」「島」、「黒松」などが多く描かれ、これらの要素は鳴門海峡の風景として普遍的な価値を有する要素といえます。一方、近世（第１期）に多くの種類の要素が描かれていたのに対し、現代（第４期）は「渦」や「白波」など要素が限定的になりました。近世は標高の高い展望台からパノラマ景を楽しむ旅が主流であり、現代は図１の写真のように船の上から渦を鑑賞する観光が主流となるなど、風景の捉え方が時代によって変化していることがうかがえます。このように、絵画を通じて過去の風景の価値やその捉え方がみえてきました[1)]。

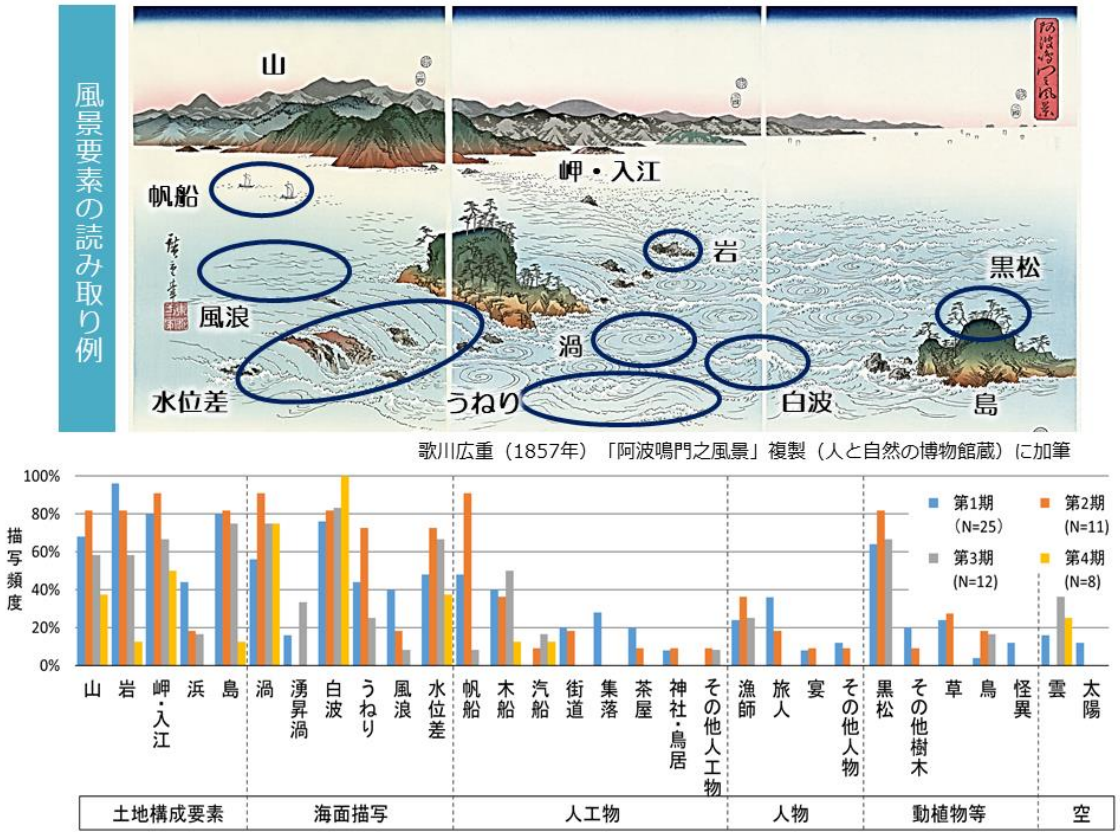

図２　絵画の風景要素の読み取り例と各要素の描写頻度

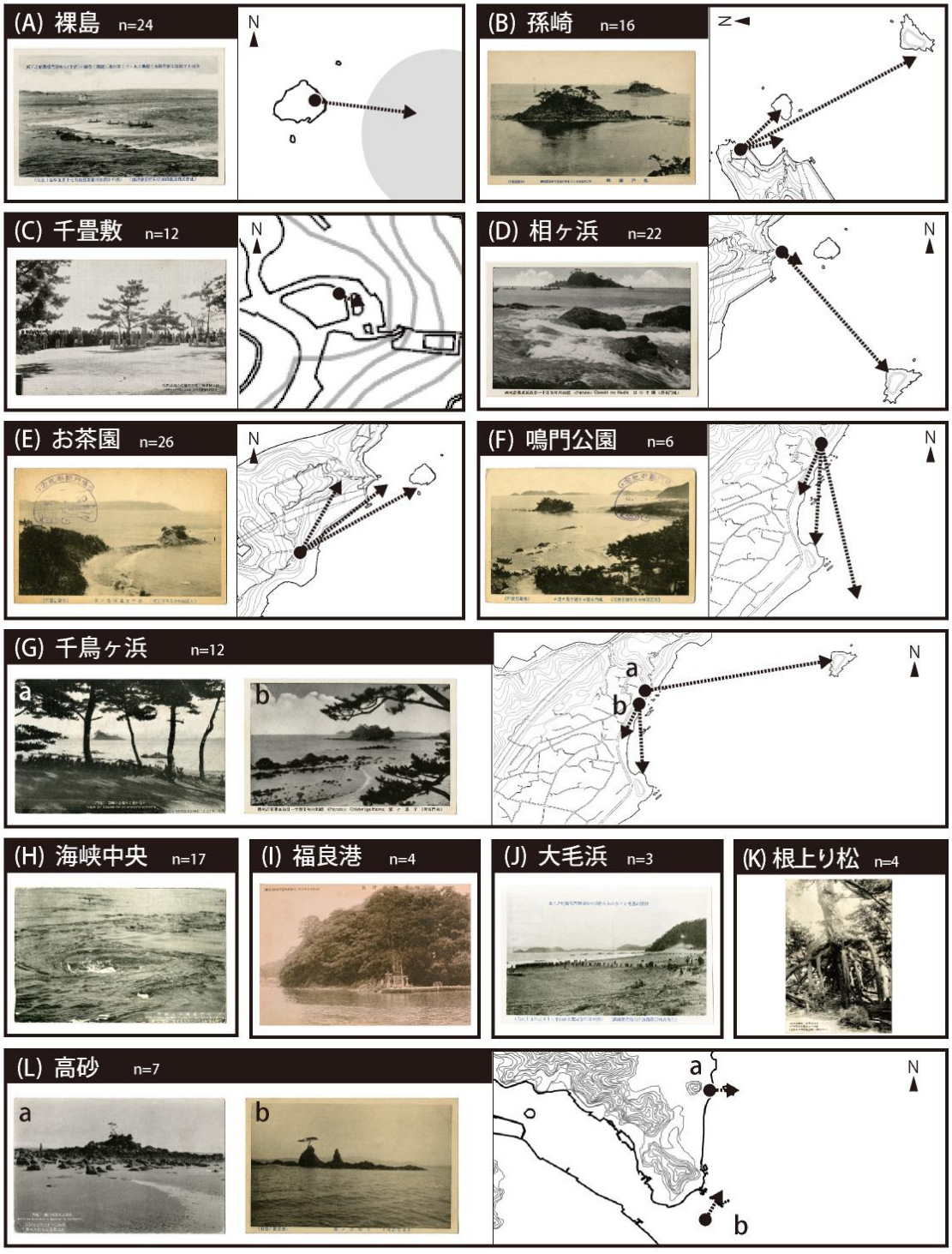

図３　各エリアを代表する絵葉書と鑑賞すべき対象
矢印で示す対象は、そのエリアの特徴として統計的に有意な関係性が示された対象を示す。絵葉書はいずれも人と自然の博物館蔵。

絵葉書に捉えられた風景から探る

鳴門海峡は、鑑賞上価値の高い風景を有することから 1931 年に名勝に指定され、その後観光地化が進められるなど、近代に大きな変化を迎えました。先の絵画の分析から、時代

によって風景の捉え方が異なっていましたが、鳴門海峡の風景の価値は、鑑賞すべき対象、あるいは保護すべき対象として近代に成熟し確立したものと考えられます。そこで、鳴門海峡の見所となっていた風景が撮影された近代の絵葉書（1913～1939 年）を 160 種類集めて、どの場所から何が映し出されていたのかを調べました。

その結果、撮影場所は A～L の 12 エリアに分けられ、図３で示すような要素が鑑賞すべき対象として捉えられていました。具体的には、海峡中央の渦潮を捉えた絵葉書はＡとＨのみとなり、島々と岬や入江が創り出す渚の風景（B・E・F など）や、岩や黒松ごしの島の風景（D・G など）、珍しい形の奇岩の風景（L）などを鑑賞すべき風景として捉える特徴がありました。このように、絵葉書から価値づけがなされた当時の鳴門海峡の風景の姿を知ることができました[2)]。

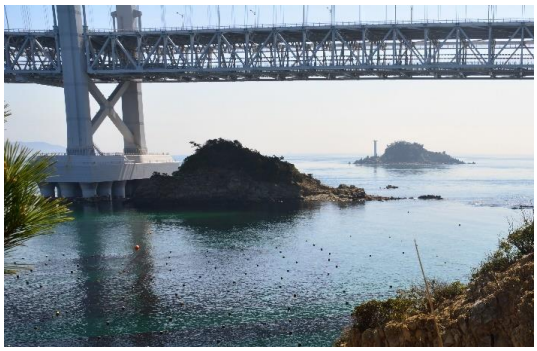

図４　現在の孫崎からの風景（図３のＢから撮影）

図５　大鳴門橋遊歩道から捉えた渦潮の風景

風景の価値をめぐる今日的課題

以上のように、絵画や絵葉書を通して風景の価値を探ると、かつての鳴門海峡の風景は、「渦潮」だけでなく、対岸の山並みや岬・入江、点在する島々や黒松・岩など多くの鑑賞すべき対象があり、それらを望む風景に価値が見出されていたことが明らかとなりました。

しかしながら現在は、海峡を大鳴門橋が縦断しており、海岸や山の頂上にはホテルや観光施設、風力発電施設などが建ち並んでおり、自然的な風景を損ねていることが懸念されます[3)]。図４に示すように、大鳴門橋の巨大な橋脚や植生の遷移などにより、価値が見出された当時から変わらぬ風景を鑑賞することは難しい状況にあります。一方で、図５に示すように、大鳴門橋の存在は、渦潮の風景を真上から鑑賞することのできる新たな展望地として評価することもできます[4)]。今後は、現在の風景の姿を捉え、変わらないものや変えてはいけない価値のあるもの、変わってしまったものや変わることを許容するもの、新たに価値を有するものを整理し、鳴門海峡の風景の本質的な価値がどこにあり、何を保護すべきなのか、議論を積み重ねていく必要があります。

「風景の価値はどこにあるのか」という冒頭の命題に対しまだまだ道半ばです。むしろ、道半ばであるからこそ、調査研究することの面白さや学術的な意義があるのではないかと感じます。

引用文献

1) 大平和弘・藤本真里・福本優・赤澤宏樹（2019）絵画にみる鳴門海峡の風景認識の変遷に関する研究、ランドスケープ研究 82(5)、pp.571-576

2) Kazuhiro OHIRA (2021) A Study of Viewpoint Areas and Landscape Features of Modern-day Naruto Strait as Seen in Postcards, Journal of Environmental Information Science Vol.2020, No.2, pp.31-41

3) 大平和弘、大野渉、白取茂（2020）鳴門海峡を捉えた眺望景観における構成要素と構成領域の評価に関する研究、環境情報科学研究発表大会論文集第 34、pp.162-167

4) 大平和弘・大野渉・白取茂（2019）鳴門海峡における渦潮の視点場と見え方に関する研究、環境情報科学研究発表大会論文集 33、pp.7-12